

桜前線が札幌まで北上してきた(5/1)。驚く勿れ、帯広も本日開花宣言だ。確かに、グリーンパークの桜もちらほら咲いていたのをウォーキング中に確認した。帯広の野草園の開園に合わせて散歩(4/29)したが、カタクリやザゼンソウもミズバショウも咲いていた。園内やグリーンパークのコブシ(辛夷)も白い可憐な花を鮮やかにつけていた。本日、東伏美の湿原に行ったが、800株とも3千株とも言われる水芭蕉が綺麗であった。朔東にも、春到来である。

昨日、天気も比較的良かったので、前から気になっていたが、ついに意を決して、官舎の庭のタンポポ取りをした。(このタンポポは一体何という種類だったのだろうか?) 表題の「田舎の神託」は、タンポポの花言葉である。気になって調べた結果を紹介する。タンポポ取りで驚かされたことは、根の深いことである。ロゼット型に付いている葉は小さいのに、根は牛蒡のように真っ直ぐで、驚くほど深く、且つ切れやすい。生存のための知恵なのだろう。この根が主たる栄養貯蔵器官であり、根は切断されると不定芽を再生する。

● 北海道発のタンポポ

北海道の動植物には、何にでも「蝦夷」という言葉を冠すれば、大体その種が、存在しているが、タンポポもその例に漏れない。(本日、前述した通り、伏美湿原に行ったが蝦夷トリカブトなるものが表示されており、蝦夷云々は正鵠を得ていると感じた次第である。)「蝦夷タンポポ」なるものが自生している。日本古来の在来種に対して、外来のものもある。札幌農学校の教師であった者(クラーク博士ではないので為念)が食用として日本に持ち込み、それが何時しか、野生化して日本中に広まったと言われる西洋タンポポがそれである。

● 外来種の生態系への影響

日本生態学会が日本に持ち込まれた外来種 2000 種のうち、生態系への影響が深刻なワースト 100 を選定しているが、その中の一種にセイヨウタンポポがある。代表的なものを幾つか挙げる。アライグマ、カミツキガメ、ブラックバス、ブルーギル、イエシロアリ、セイタカアワダチソウ、ホテイアオイ、アメリカザリガニ etc 今日、生物の絶滅の大きな要因として外来侵入種の存在が強く指摘されている。外来種が在来種を食べたり、生活場所を奪ったり、交雑する事により、生態系のバランスを破壊している。今、正に抜本的な対策が望まれる。

● 繁殖力絶大なセイヨウタンポポ

西洋タンポポは、夏季にも地上部を展開し、秋まで開花を続ける。また、高温による発芽抑制がなく、発芽期も一定していない、種子は在来種の半分ほどの重さでよく飛ぶので、広範囲に種を植え付けることが出来る。更にはアルカリ性の土壌にも強い。受粉に関係なく無性的に種子を作る事が出来る等の理由により、非常に強い繁殖力を有している。何れ席卷されるのだろうか。セイダカアワダチ草にも似て。

● さて、タンポポの種類は、幾つあるのだろうか。

北半球を中心に温帯から寒帯まで広く分布し、約 2,000 種に分類されている。日本には帰化種を除き、約 10 種が自生する。(温帯から暖帯にかけて 400 種、日本には約 20 種との説もあり。)

曰くカンサイタンポポ(近畿～北九州)、トウカイタンポポ(静岡東部)、カントウタンポポ(関東地方)、シナノタンポポ(甲信越地方)、ヤナギタンポポ(北海道、本州、四国)以上は黄色花で平地部に自生する。タンポポは黄色い花ばかりだと思ったら間違いで、シロバナタンポポは白い花であり、九州や四国の一部には白花しか分布していない所もあると言う。

他にも白い花のタンポポはキビシタンポポ(中国、四国地方)、オクウスギタンポポ(東北地方)等がある。また、タンポポは平野部に咲くものと思っていたら間違いだ。北海道の高山地帯に自生するクモマタンポポも珍しい。北海道と言えば、矢張り蝦夷タンポポを挙げない訳にはいかないだろう。この種は、北海道から東北地方の低地(及び関東以西の山地?)に生育し、主に三倍体であり、頭花は濃黄色で大きく、径は 5cm になる。シコタンタンポポ(東北海道、千島)、ユウバリタンポポ(北海道夕張岳)、オーヒラタンポポ(北海道大平山)等もあるらしい。

日本では、外来種のタンポポのうち、実の色が茶色ものをセイヨウタンポポ、桃色があったものをアカミタンポポと呼んでいる。前述したアメリカから持ち込まれた物が日本各地に広まったのではないとの指摘もあるので付言しておく。

#### ● セイヨウタンポポと在来種との見分け方

自生する場所の差がある。外来種は、日が当たれば運動場や道路のようなところでも大丈夫だが、在来種は、木や草が多い所でも冬から春にだけ日が当たれば大丈夫である。

① 花粉がなければ外来種 ② 総苞片に外向きの突起(小角突起)が明瞭にあれば在来種 ③ 花が開くに連れて外総苞片が内総苞片から次々と離れ、反転すれば外来種 ④ 以上に該当しない場合、総苞の色が黄緑色で肉厚な感じなら在来種、緑色で薄手の感じなら外来種との判断基準があるようなので、参考までに、多分素人には無理だろうが…。在来種は、田圃の周りや農道脇など人里に自生し、帰化種は、道路脇や広場・住宅地など比較的新しく工事などが施された所等に生えている。

#### ● 中間種の発生

セイヨウタンポポと在来種との遺伝子結合による中間型が多くなってきている。

従来は、外来種は、無配偶生殖をするし、花粉は不稔(成熟した雌雄間に子孫を生じえないこと。生殖器官の発生不全、生殖細胞の不和合性、異常発生などが原因で起こる。主に植物についていう。)だから雑種は考えられないとされてきたが、中間型が実験でも確認され、野外でも見つかっている。

#### ● 厄介者を逆手に

タンポポは見た目には春を告げる花として黄色い絨毯が綺麗だが、実際は芝生を侵食し厄介者でもある。この厄介者を逆手に取ってみようではないか。

タンポポは有用な植物でもあり、実際に活用されてもいる。食用として、葉をサラダにしたり、茹でて和え物に、天麩羅や根をキンピラにしたり、スープにしたり、飲料として、ヨーロッパではタンポポコーヒーが、日本ではコーヒー以外にお茶としても販売さ

れている。薬用としても、利尿、健胃、浄血等の効能が知られている。タンポポの乳は、傷を塞いだり細菌やカビの進入を防ぐ役割をしており、ある種のタンポポでは、この乳液にゴム質を多く含むのでゴムが作られている。

北海道のある町（21世紀枠で甲子園初出場、爽やかプレーの「ししゃも打線」の、あの鶴川高校のある鶴川町？）ではこのタンポポで町興しをしている。

(参考：百科事典、HP etc)